

一期一会の感動が
今まで以上に
大切だと思える
ようになった。

前編

ネイチャー クリエイター

倉方 志磨



～目次～

- まるでアナグマと一緒に莓を育てているような気に…
- 小学生の時に、蛇にかまれた子がいて、私の遊び場がフェンスで囲まれてしまったんです（笑）
- 「開発」という行為なんだけど、保全・保護を知った人なら両立するデザインができる。
- 自分の役割は「自由な間」を作ること。脇役、裏方だと思っています。

まるでアナグマと一緒に莓を育てているような気に…

2008年に長野県伊那市に移住し、2014年ごろからは伊那でもさらに田舎の旧高遠町エリアに住んでいます。結婚をきっかけに夫の地元へ移住しました。TONZAKOデザインのホームページで展開している私のコラムは、そんな伊那での暮らしの出来事が中心です。

最近は庭のイチゴの実が赤く色づいてきました。そろそろ食べ頃かな、明日には採って食べよう、と楽しみに翌朝を迎えると、食べ頃のイチゴが消えている日々。結局私はまだ一度も食べられていません。これはきっとアナグマの仕業。私は遭遇したことはありませんが、庭に穴があいていてアナグマが来た形跡は感じます。アナグマも色づいていないイチゴは「まだ食べ頃じゃないな」とスルーしているのでしょうか。アナグマも美味しく食べたいのかな。こうなるとアナグマと一緒にイチゴを育てているような気になります（笑）。



小学生の時に、蛇にかまれた子がいて、 私の遊び場がフェンスで囲まれてしまったんです（笑）

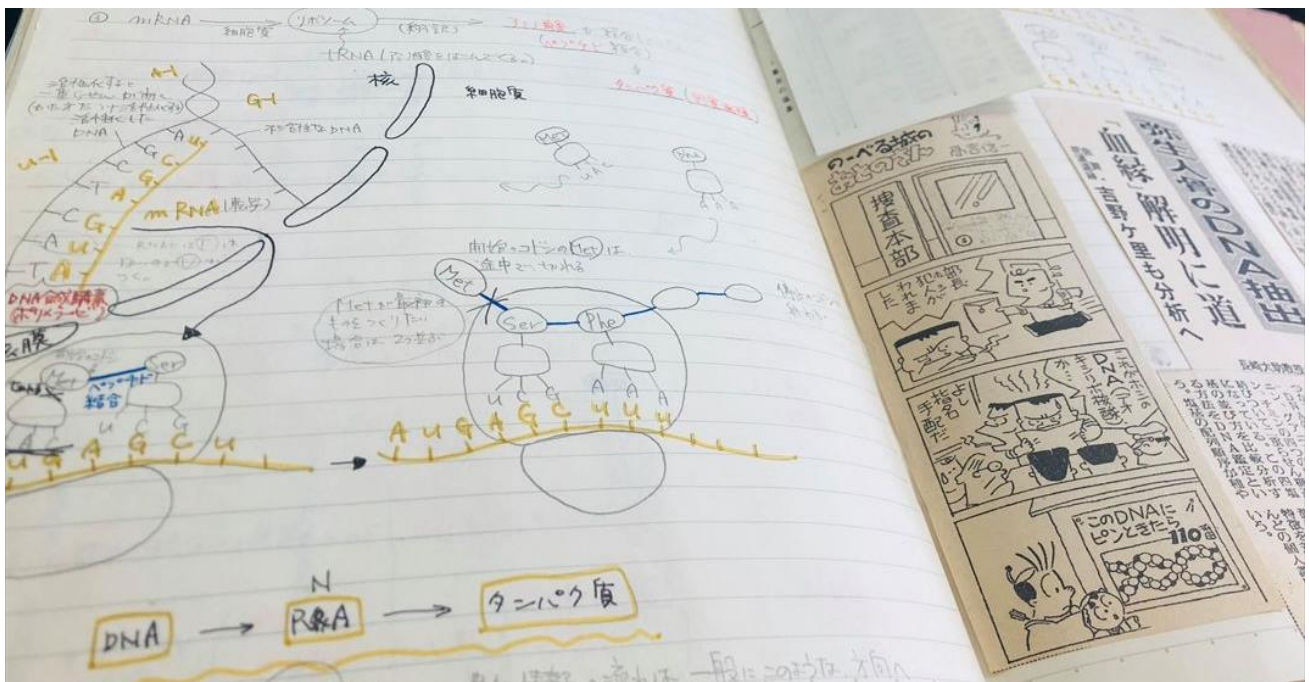
私の地元は神奈川県横浜市。横浜といっても市街地側ではなく、それこそ里山が比較的多く残っている地域でした。小学校の頃は、ちょうどニュータウンが建ち始めた時期。山があって田んぼがあるような所が、次々と開発されていきました。

小学校に上がる前後までは、楽しい空き地が近所中にありました。誰の土地か分からないけど、子ども達が自由に入り込んで遊べるような場所。春は空き地でつくし採りができるから、友達と一緒に箱いっぱいにつくしを採りました。ある日は、ほら穴を掘って探検ごっこ。ある日はスイカの皮を山に仕込んでカブトムシ捕り。田んぼでドジョウやザリガニを釣っては、庭の池に放流して飼っていたことも。そんな暮らしが続いたのは、小学校に上がってしばらくしたころまで。ある日、町の小学生がヘビに噛まれて問題になり、近所中の空き地がフェンスで囲まれてしまいました。遊び場が閉ざされて子ども心にショックだったなあ。それが今の仕事に繋がる原体験です。



今の子ども達は勝手に生物を捕ったり、穴を掘ったりして遊ぶ場所がほとんどありませんよね。そんな体験が、なかなかできなくなってしまいました。私が昔楽しかった遊びを今の子ども達にも味わって欲しいな。そんな私なりの意思が、今の仕事に繋がっていると思います。

都市部の環境問題や環境改善について学び、卒業後は仕事にしたい。そう考えていた高校時代に、担任の先生が“造園コンサルタント”っていう言葉を教えてくれました。そして入学したのが園芸学部緑地・環境学科です。



高校時代の生物のノートが、今でも手元にたくさん残っています。

「開発」という行為なんだけど、 保全・保護を知った人なら両立するデザインができる。

大学入学後は、自然公園の管理をお手伝いするサークルに入りました。私が派遣されたのは日光国立公園尾瀬特別保護地区（現・尾瀬国立公園の一部）。そこでは環境省のレンジャー（自然保護官）が、公園の自然環境を保護するための様々な活動（自然調査や巡視、施設の整備・管理、環境教育など）をしています。私達学生は、サブレンジャー。レンジャーさんを補佐する役です。来訪者が多い夏休みなどに、広大な国立公園内を歩き回って案内や自然解説、ごみ拾い、トイレ清掃などをしていました。



そうしているうちに興味の方向が“都市”から“自然”へと移っていきました。自然を大切にしたい一方で、開発に断固反対という訳ではない。保全や保護の必要性を理解しながら開発する道もあるんじゃないか。そんな“両立するデザイン”ができる仕事に就きたいと思うようになりました。

憧れていたのは環境省のレンジャーでした。が、残念ながら環境省には入れず。環境系のコンサルタント会社に入社しました。その会社にいたのが松崎さんです。気づけば、もう二十数年の付き合いになるみたいです。

プレック研究所は、当時の社長夫婦が環境省の元レンジャー。施設などを開発する前には、動植物や水環境など、あらゆる自然環境を調査し開発による影響を評価する環境アセスメントがあります。その調査に強い会社で、設計では自然公園を多く扱ってるというイメージがあり入社しました。担当になった部署は設計です。自然公園~都市公園まで、様々な公園施設などを設計し、松崎さんには色々教えてもらいました。



**自分の役割は「自由な間」を作ること。
脇役、裏方だと思っています。**

設計の仕事に就いたものの、設計図を描くのは今でも苦手。もちろん仕事だからやるのですが、何年やっても馴染まない。自分の線が残ってしまうのが好きじゃないんです。自分の痕跡を残したくない。自分は完璧じゃないと思っているから。

クリエイターとは、完全無欠なものをつくらない人。“余白”を作ることができて、関わる人々（作る人、利用する人）に化学反応を起こさせる人。それがクリエイターだと思います。地域に公園を作る際、地元の人と一緒にプランを考えるワークショップをすることがあります。こちらが叩き台を提示するのですが、隙の無い完璧なものだと、誰も何も言えなくなっちゃう。参加者同士で化学反応が起こると、誰もが思いもよらないような展開になり、そっちの方が絶対に面白い。だからクリエイターは化学反応を起こさせる人であるべきと思っています。現実には予算や締切が既に決まっていて、どうしても押しつけになりがちなんですけど。

会社もそんな私の考えを理解してくれ、隙のないデザインを求められなくなりました（笑）。楽しかった仕事は屋久島の登山道。屋久島は世界遺産に指定され脚光を浴びた結果、登山者が増え、雨の多い気候と風化しやすい花崗岩の山という自然条件が相まって、登山道が荒れてしまう問題が発生。荒れた登山道をどうやって修復する?!屋久島にあった道づくりと利用のあり方を考える仕事がありました。大雨が降り注ぐ中、登山道の排水について考えたり、人が歩きたくなる、または避けたくなる歩道について考えたりしました。



化学反応がとても楽しかった、思い出深い仕事があります。それは川崎市の緑地公園の仕事。健康を増進する緑地を市内の区ごとに作ろうという事業でした。住民の皆さんに呼びかけると、皆で現地調査したり、実際に樹林の手入れをしたり、とても積極的。公園完成後も進んで管理して、その結果、希少な植物が復活する出来事がありました。皆で描いた計画・目標に向かって、皆で汗水流して頑張ったら、本当に望んでいた環境・空間が出来たんです。私も一人の参加者として感動しました。事業が担当者の手を離れ、完全にひとり立ちできた一例です。そこに私の痕跡は何も残っていません。



一期一会の感動が
今まで以上に
大切だと思える
ようになった。

後編

ネイチャー クリエイター

倉方 志磨



～目次～

- 行政のためになっているけれど、地域のためになっているのかなあ？って思ってしまう。
- 一応役員ですが、成り行きでこうなっている状況で（笑
- 密で繋がれなくても、人は交流したいんだなあ。自分が考えていた以上に。
- 「クリエイター」って「レクリエーション」と関係がありそうだなあと思うんです。
- ちょっと手を入れたら、気持ちいい森になりそうだなあっていう場所があるんです。

行政のためになっているけれど、地域のためになっているのかなあ？って思ってしまう。

仕事の中には「クライアントのためにはなっても、利用者のためになってるのかな？」と考え込んでしまうものも色々ありました。モヤッとした気持ちが少しずつ膨らみ、ズレが次第に大きくなっていったような気がします。

前職を退職した今、暮らしている田舎では、シャッター通りになりかけの所や、農地では耕作放棄地が増え景観的に荒れてみえるような所があります。地域活性化に取り組む動きもあるのですが、

動きを興すのは大抵都市部からの移住者が多いように思います。問題意識と、何よりこの地域の良さに気づいて取り組んでいくのですが、住んでいる人は必ずしもそれほど問題とっていない……、謙遜かもしれないけど、地域の良さも感じていない。スタート時両者には大きなズレがあり、互いの認識を摺り合わせるのには時間と労力が必要です。でも時間がないから、せっかくの活性化の動きが空回り、みたいな事が起こっています。

一応役員ですが、成り行きでこうなっている状況で(笑)

TONZAKO デザインに入った理由は、新人時代にお世話になった松崎さんに誘われて。その数年前に、父の病気がきっかけで実家の家業を手伝うため退職していました。退職後はフリーランスとして同じような仕事を請け負ったり、実家の経理をしたりしていました。

小森さんと出会ってからは、松崎さん同様二十数年になります。前職で部署も事務所も違ったので、一緒に仕事をしたことはありませんが、はっきりと残っている印象は、さわやか青年、だけど「痛風の人」(笑)。営業時代に色々大変だったのだろうと察します。

山田さんと知り合ったのは TONZAKO デザインの発足がきっかけです。でもそれ以前から知っているような気になっています。それは松崎さんの話に、山田さんの話題がよく出てきていたから。松崎さんが夢の話をすると、山田さんの名前がよく出ていました。



私と TONZAKO デザインは成り行きの関係と言いましょうか（笑）。表向き「4人で TONZAKO デザインを発足した」ように見え、今回スタートした仕掛け人インタビューコーナーでも初っ端メンバーに混ぜていただけてますが、申し訳ない気持ちに。私、いい加減な人間なもので。3人のような熱量を持ち合わせてなくて申し訳ない。

松崎さん、山田さん、小森さんの3人には、仕事への強烈な情熱とブレない軸があります。この3人だからこそ生まれる唯一無二の仕事が、近々起こるのではないかと思います。伸びしろや可能性はいっぱい感じています。そこに私が入るのはおこがましく、TONZAKO デザインは3本柱という気がしていますね。

私としては仕事にどっぷりではなく、伊那の田舎暮らしで自分自身を満足させたい。これは完全に私のわがままですが。他の皆さんと同じペースで仕事できないという事情で、事務的な事をメインで担当しています。メインは総務や経理で、ランドスケープのお仕事は補助的な役割と捉えています。

**三密で繋がれなくても、人は交流したいんだなあと。
自分が考えていた以上に。**



“コロナの影響”について、これからどうすれば良いかという答えまではたどり着けていません。最近それを考えるヒントを地元の広報誌で見かけ、印象に残っています。内容は、人は密閉・密集・密接に繋がらなくても、「誰かと親密に交わることができる」という記事。人はやっぱり、誰

かと繋がりたい、交流することを求めていると。例えば自粛期間中にクラウドファンディングを多く見かけましたが、支援を通じてより深い結びつきを感じることが出来るんだと気づかされました。家にいても心満たされる繋がりを持てるんだなあと。繋がる方法は他にも色々あるのかもしれない。

私達は今まで当たり前のように「いかに人を集めるか」ということを念頭に置き、集客施設づくりを考えてきましたが、その考えを改めるべき時と思っています。次に人々が集まる時は、今まで以上に価値ある機会になりそう。より一期一会を意識するようになり大きな感動が生まれそうです。とにかく人々の考え方が今までとはすっかり変わってしまったと思います。

「クリエイター」って「レクリエーション」と関係がありそうだなあと思うんです。

「クリエイター」とは何かを考える中で、他の方にも聞いてみたいと思った話題があります。それは、クリエイター（creator）、クリエーション（creation）、レクリエーション（recreation）の関係について。クリエーションの意味を調べると創作や創造と出てきます。それに対してレクリエーションは、余暇やレジャー、娯楽といった意味。レクリエーションは“Re・creation”とも解釈できてその意味は再創造になります。

ふと考えてみると、レクリエーションは日常を離れて自分をリセットし、もう一度出直す、リフレッシュすること。クリエーションもレクリエーションも結局はリセットしてもう一度作ることを意味するのではないかなと思います。クリエイターとは、何かをつくる人と捉えがちですが、物を作る人というより、作り直す人。クリエイターが提供するのとは物だけではなく、リセットする過程や

体験なのかもしれない。それが、誰かにとって心が洗われるような感動体験となったなら、次また頑張ろうって思える時間となったなら。そんなクリエイターになれたらいいのかもしれない。



将来 TONZAKO デザインでできたらいいなって個人的に思っているのは、直営の集客体験施設。地域の人達が色々なことを体験できる場で、それが私達の職場、ということがやれたら面白いと思います。

こちらが企画した体験プログラムを提供するような一方通行じゃつまらないので、利用者と相互交流になるような何か。みんなが集まれる拠点を持って、そこから色々と派生できれば面白そうです。内部で「廃校を買いたいね」っていうこともよく話題になります。みんなの職場であり、宿泊施設であり、学校であり、みたいな場所になったら面白いかなって。

ちょっと手を入れたら、気持ちいい森になりそうだなあっていう場所があるんです。

最近、プライベートで夢中になっているのが、家の裏山整備です。地域は過疎化が進み、耕作放棄地がいっぱい。みんな高齢化して森の中に入らなくなり、森は暗くて荒れた状態になっています。少し手入れをするだけで、明るい森や楽しい道が復活しそうなのに……。そんな訳で集落が共同所有している場所を、夫と少しずつ手入れさせてもらっています。

「間伐した木を山に転がしてあるから、持ち帰って薪にしていよいよ」と集落の人に言われ、お言葉に甘えてせつせと木を持ち帰っています。倒木を整理して広くなった山で、次は松茸を育ててみたいな。季節の花はもう咲いたかな。終わったかな、早く見に行かなきゃ。そんな風に毎日気になってしまい、仕事してる場合じゃありません（笑）。

裏山に生い茂る下草を刈ってみると、昔の道があらわになります。少し手を入れるだけで、遠くにアルプスの山々が見える、気持ちの良い遊歩道になりそう。腰掛けを置けばティータイムを楽しめるかも。以前は仕事としてでしたが、今は自分の楽しみのために山の整備ができたらいいなと思っています。



取材：川北睦子